
さるかに合戦

雑兵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さるかに合戦

【著者名】

Nゾード

N3622P

【作者名】

雑兵

【あらすじ】

猿に母蟹を殺された子蟹達は復讐を決意しました。

昔々あるといひて、おむすびを持った蟹と、柿の種を持った猿がいました。

猿が蟹に言いました。

「あんたのおむすびとあたしの種、交換しない？」

「あらあら、ごめんなさいねえ。私、お腹の赤ちゃん達の為に沢山食べなきゃいけないの。そんなに小さな柿の種とは、交換できないわ」

「な～に言つてんのよ。おむすびは、食つたらそれまで。それにひきかえ柿の種を埋めて育てれば、いくらでも柿が食べられるのよ～」「まあ。それは素晴らしいわねえ」

「うして、蟹は柿の種を、猿はおむすびを手に入れました。猿はあつと言つ間に、おむすびを平らげました。

「おむすびマジヤバインですけど～」

蟹は柿の種を地面に埋め、毎日せっせと育てました。

そしてついに、沢山の柿の実が生りました。

蟹は早速柿を食べようと思いましたが、蟹は木に上れませんでした。

そこへ、柿の種をくれた猿がやつて来ました。

「あら、猿さん。この間は柿の種をどうもありがとうございました。やつと実が生ったのだけど、私ったら、木に上れない事をすっかり忘れちゃつて困っちゃつたわあ

「そ～れ～な～ら～、あたしが代わりに柿の木に上つて柿の実を採つてあげる、みたいな～？」

「あらまあ。そうしてもらえると、助かるわあ

「お安い御用、つて感じ～？」

蟹が事情を説明すると、猿は快く柿の木に上つてくれました。

しかし、

柿の木に上つた猿は自分ばかり柿の実を食べて、蟹には一つも柿の実をくれません。

「やつぱスイーツよね～」

「あらあら、美味しい柿の実が生つたみたいねえ。私にも、一つくださる？」

「ぐださる？ なにそれ、猿をバカにしてんの～？ マジありえないんですけど～」

「あらやだ！ そんなつもりは無かつたのよお。ごめんなさいねえ」「別に～ど～でもい～つてゆ～か～。そもそも柿の実は全部あたしの物じやないですか～」

「え？」

「だつて～、あたしが持つてた柿の種だつたわけだし～」

「それを私のおむすびと交換したんでしょ？」

「え～？ あたしそんなの知らな～い」

「そ、そんな……」

蟹は気きました。

自分は猿に騙されたのだと。

猿は蟹が木に上れない事を知つてて、おむすびと柿を一人占めにしようとしたのです。

ですが、もうすぐ子供が産まれる蟹にはビリしても柿の実が必要です。

蟹は猿に頼みました。

「おねがい。柿の実をちょうどだい」

「うつさいわね～。これでも食べてね～」

猿はまだ青くて硬い柿の実を、蟹に投げつけました。硬い実が蟹の体に当たり、蟹の脚が一本折れました。

「ああ～！」

「アハ～！ チョ～ウケルんですけど～。えいつえいつ」

バキッ
ぐちやッ

猿は次々にまだ青くて硬い、とても食べられそうにない柿の実を蟹に向かつて投げつけました。

蟹は避けられず、柿の実が当たる度に甲羅にはひびが入り、脚は折れ体を支えられなくなります。

それでも、蟹は必死にお腹に抱えた卵達を庇います。

「やめ……やめて……。赤ちゃんが……いるの……」

「はあ？ あたしそんなの知らな～い」

蟹が懇願しても、猿は硬い実を投げ続けます。

すでに蟹の眼は二つ共潰れ、痛みも感じなくなっていました。

「ごめんねえ、赤ちゃん達。ママ……あなた達に……会えない、の

蟹は死にました。

蟹が最期に思ったのは、自分を騙した猿への憎しみでも、猿の企みに気付けなかつた悔しさでもなく、愛する我が子達に会えない事への寂しさでした。

柿の実を食べて満腹になつた猿は、どこかへ行きました。

「やつだ～。ダイヒツしなきも～」

しばりへすると、すでに死んでこるばずの蟹の体が蠢きだしました。

その体の下から、小さな赤いものが出てきます。
それは蟹の子供達でした。

母蟹が必死に守つたことで、誰一人死ぬことなく産まれる事が出来たのです。

ですが、子蟹達の中に産まれた事に対する喜びはありませんでした。

「ママ
「ママ……
「ママ
「ママー.
「ママー.

口々に母蟹に呼びかけますが、返事はありません。
呼びかけが、やがて嗚咽に変わつてこきます。

「ママ、ママ……うわあ……あああああああああん~.

！――――

子蟹達は、涙が涸れるまで泣きました。
涙が涸れると、悲しみのいた場所に、違う感情がいました。
憎悪でした。

時は流れて

猿への復讐を決意した子蟹達に賛同する者達が現れました。
栗、蜂、牛糞、臼です。

四人は猿を家に招きました。

「こんなにちは……あれ？」

猿が家を訪れると、誰も居ません。

猿は団炉裏のそばで待つことにしました。

団炉裏の中には、栗が隠っていました。

団炉裏の中で熱くなつた栗が飛びだし、猿の股間に抱き付きました。

猿は大火傷をしました。

猿は慌てて水瓶に飛び込みます。

水瓶の中には、蜂が隠れています。

蜂は猿の乳首を刺しました。

あまりの痛さに、猿は家から走り出ました。

家の前の地面には、牛糞がいました。

牛糞を踏んだ猿は引っくり返りました。

牛糞は猿の体を這い回りました。

乳首や股間に牛糞が染み、その痛みと牛糞の臭さで猿は悶えます。

そこへ、屋根にいた臼が飛び降りました。

臼に潰されて、猿は死にました。

めでたしめでたし。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3622p/>

さるかに合戦

2010年12月14日18時03分発行